

## 第2章 調査に至る経緯と概要

### 第1節 調査に至る経緯

#### 1. 調査に至る経緯

2007年度に岡山大学病院中央診療棟の改築工事が計画され、発掘調査の予定敷地内にある病棟や厨房棟を撤去することとなった。病院機能を継続したまま同建物類の解体並びに建設工事を進めるため、調査対象範囲を2つの工期に分けて発掘調査を実施することとした。Ⅰ期工事分は2007年度（2007年9月～2008年3月）に第18次調査として実施した。建設予定地の北東部872㎡が対象である。2009年度にはⅡ期工事分の調査が開始された。既存建物の解体や諸施設の付け替えを経て、第20次調査として、A地点（632㎡）、B地点（2,482㎡）、2010年度にはC地点（276㎡）、D地点（15㎡）と順次発掘調査を実施した。さらに2013年度には前述の第20次調査A地点の南北において、2,545㎡を対象に第25次調査を実施した。2014年8月までに、中央診療棟関連の発掘調査はすべて終了した。総面積は6,822㎡を測る。

これらの調査地点については、複数地点をまとめ、3冊にわけて報告することとした。まずⅡ期工事の西側3,177㎡を対象とした第20次調査A地点および第25次調査地点の成果を『鹿田遺跡12』として2017年度に刊行した。次いで、Ⅱ期工事東側の2,497㎡にあたる第20次調査B地点・D地点の成果を、本書において報告する。最後に刊行するⅠ期工事分1,148㎡を対象とした第18次調査A地点・第20次調査C地点については、整理作業が進行中である。

本書で報告する第20次調査B地点は表土掘削を2009年9月から開始し、調査員4名が担当して2010年3月までの予定とした。同D地点は表土掘削を2011年2月に開始し、調査員1名が担当して同年3月までの調査予定とした。

#### 2. 調査の体制

調査主体	岡山大学 学長 千葉 喬三	【第20次調査B地点】
調査担当	岡山大学埋蔵文化財調査研究センター センター長 北尾 善信 副センター長 新納 泉	調査研究員：教授 山本 悦世（調査主任） 助教 岩崎 志保 助教 池田 晋 助教 野崎 貴博
		【第20次調査D地点】
		調査研究員：助教 岩崎 志保（調査主任）

#### 運営委員会

<委員>第20次調査B地点・D地点調査年度（2009・2010年度）

北尾 善信	財務・施設担当理事（センター長）	沖 陽子	大学院環境学研究科教授 （調査研究専門委員）
新納 泉	大学院社会文化科学研究科教授 （副センター長）	山本 悦世	埋蔵文化財調査研究センター教授 （調査研究室長）
久野 修義	大学院社会文化科学研究科教授	山下 隆幸	施設企画部長
柴田 次夫	大学院自然科学研究科教授		
大塚 愛二	大学院医歯薬学総合研究科教授		

報告書刊行年度（2021年度）

袖山 禎之 財務・施設担当理事（センター長）  
 清家 章 学術研究院社会文化科学学域（文）教授  
 （副センター長）  
 松本 直子 文明動態学研究所教授  
 今津 勝紀 文明動態学研究所教授  
 大橋 俊孝 学術研究院医歯薬学学域（医）教授

加藤 鎌司 学術研究院環境生命科学学域（農）教授  
 野坂 俊夫 学術研究院自然科学学域（理）准教授  
 岩崎 志保 埋蔵文化財調査研究センター准教授  
 （調査研究室長）  
 岩永 仁 施設企画部長

### 3. 調査経過

#### 【第20次調査B地点】

**表土掘削** 2009年6月より調査対象地の既存建物の解体工事が進められ、同年9月7日から調査員1名が立会い、表土掘削を開始した。本地点では北半に旧厨房棟、南半に旧病棟建物があったことから、大形基礎の存在が広く予想され、その大形基礎の撤去を避けた結果、調査区南半には43塊のコンクリート基礎が並ぶこととなった（図

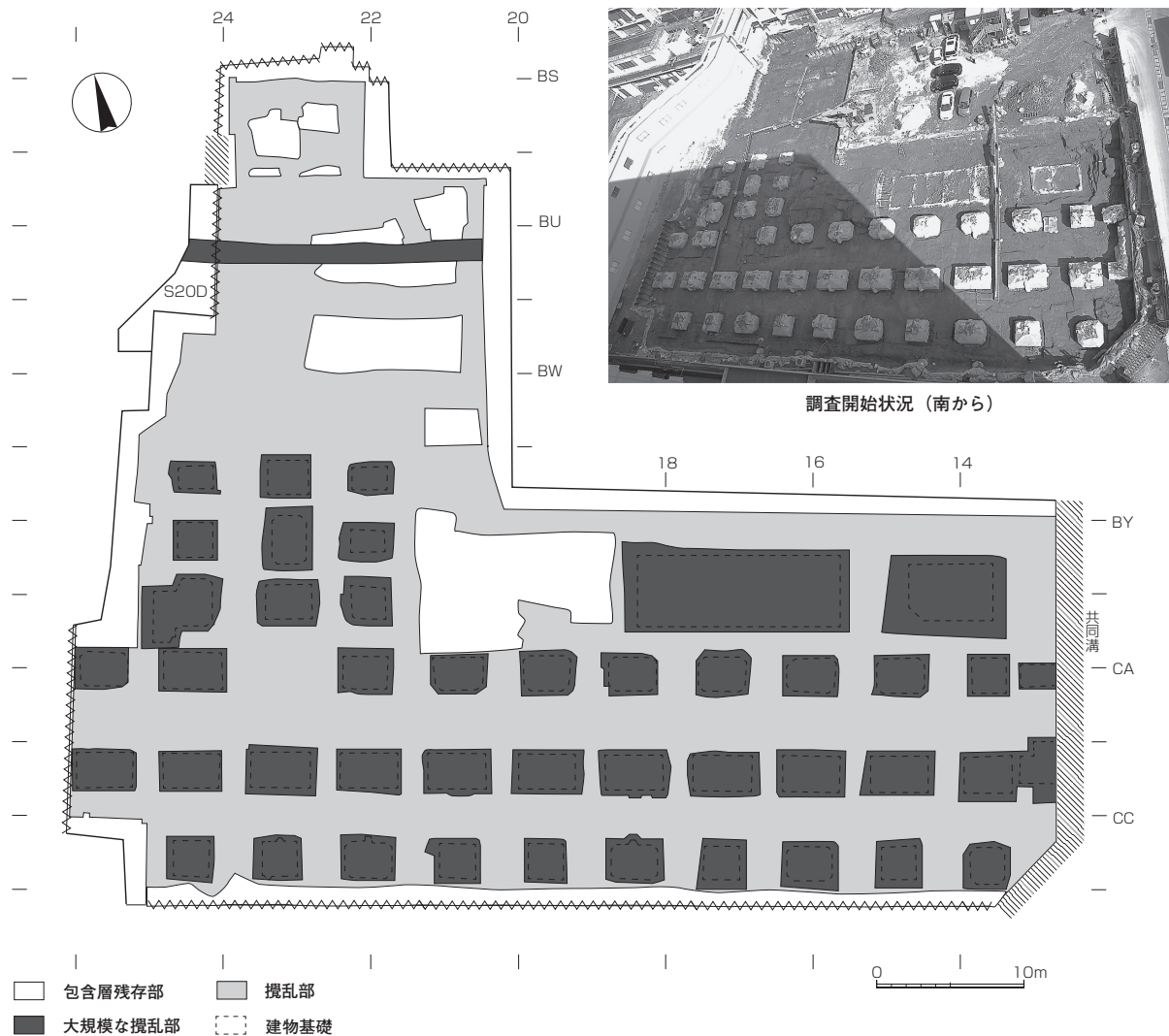


図3 調査開始状況（縮尺1/500）

3)。その破壊の度合いは予想を遥かに超えるものであり、基礎の規模の大きさ、密度の高さ、それに加え、基礎部のみならず建物敷地全体を基礎下面まで掘削するという建設工事時点での工法の違いから、調査区南半部の破壊は広範囲かつ調査終了面以下まで及ぶものであることが判明した。さらに東側では、大形の浄化槽設置に伴う大規模な破壊も加わり、こうした破壊が及ぶ状況下では、包含層は全く残っておらず、破壊部下面で確認された数基の井戸と大溝を残して、全ての遺構は消失していた。

包含層の残存度が高いのは、旧建物敷地外にあたる、調査区南端の幅約1mの範囲、および中央部や北側に島状に残る高まり部のみであった。またBXライン以北では、基礎部はすべて撤去することができ、破壊深度も多少浅いことから、弥生時代対応の土層は残されることとなった。

表土掘削は10月13日に終了した。

**発掘調査** 発掘調査は2009年10月15日から開始した。調査にあたっては、対象地域を形状に合わせて南北に大きく分け、さらに南部分を東西に二分し、北区・東区・西区の3区に分けて、遺物の取り上げや記録に対応した。

まず広範囲に広がる攪乱部分の清掃を行った。その多くは基盤層におよぶ破壊であったため、作業過程において多くの井戸・溝を検出することとなった。発掘調査開始状況の写真撮影後、近世土層から順次各時期の調査に入るのが通常の手順であったが、攪乱底部で検出された遺構の保存が懸念されたうえ、遺構の時期確定が困難な状態であったため、時期の異なる遺構の調査も同時に進めざるを得ないと判断し、作業を進めた。

包含層が比較的厚く残る部分では、戦国期～近世に埋没した溝・土坑等の調査を終え、鎌倉時代、平安時代後期の土層へと掘り進めた。遺構の密集地での時期の判断は難しく、複数の時期の遺構を同一面で確認するという状況となった。残存度の高い北区を中心に柱穴群・井戸・溝を、攪乱が顕著な東区・西区では掘削深度の深い井戸や大形の溝を順次調査し、平安時代後期～近世の全景を撮影した。

弥生時代後期～古墳時代初頭段階の面まで掘り進むと、高低差のあった調査区はほぼ平坦となり、特に北半部では、破壊の影響は姿を消した。調査区北半の北東部で地形の落ち部分に遺物が集中して出土することを確認したほか、溝を検出した。南半部でも井戸・溝などが検出された。それらの調査を2月19日に終え、同22日に補足の記録を採取し、発掘調査を終了した。

その後、調査区内に残る基礎43か所の撤去に伴う調査を3月1日から開始し、調査員1名が対応した。基礎の下面を調査する作業の中で、溝・土坑の重複関係等を確認し、3月8日に作業を終了した。なお工事の都合から、調査区北西部に狭小な面積の未調査部分（後述D地点）が残ることとなり次年度に対応することとなった。

平安時代後半～戦国時代の調査が終了した段階で、1月23日に現地説明会を実施し、160名の見学者を得た。

#### 【第20次調査D地点】

前述のように2009年度に実施したB地点の調査範囲のうち工事の都合上未調査であった北西部15㎡について、2011年2月18日に造成土の除去を実施した。

発掘調査は同2月21日から開始し、調査員1名が対応した。包含層の残りは良く、近世面で土坑・溝を確認した後、中世面で土坑・溝・ピットを検出した。次いで弥生時代後期～古墳時代初頭頃の面まで掘り下げ、3月2日にすべての調査を終了した。

## 第2節 調査の概要

本調査においては、弥生時代後期～古墳時代初頭、中世前半、中世後半～近世の遺構が確認された（図4）。

**弥生時代後期～古墳時代初頭：**<7>～<10>層が本時期に対応する。井戸・土坑・溝を検出した。調査区中央部では井戸1基、土坑1基と、北東～南西に走行する溝、並びに調査区南端を北西～南東へ走行する溝群を確認した。これらの溝群は、南側の第9次・11次・14次調査地点で確認されている弥生時代後期～古墳時代初頭の耕作域に関連する溝群と考えられる。また北区北東部では北東へ向けて下がる地形の落ちが確認され、埋没後その肩部には溝（溝9）が検出された。この落ちは、北東側の第18次調査地点中央に延びる微高地の縁辺を巡るものにあたる。落ちには遺物が比較的多く出土し、斜面堆積の遺物として報告するが、本調査地点全体としては遺構・遺物とも希薄な状況と言える。

**中世前半：**井戸13基、土坑4基、溝11条を検出した。時期毎に概観する。

**11世紀前半～12世紀前半：**11世紀代～12世紀初頭に井戸2・3、11世紀後葉～前葉に井戸4・5、12世紀初頭～

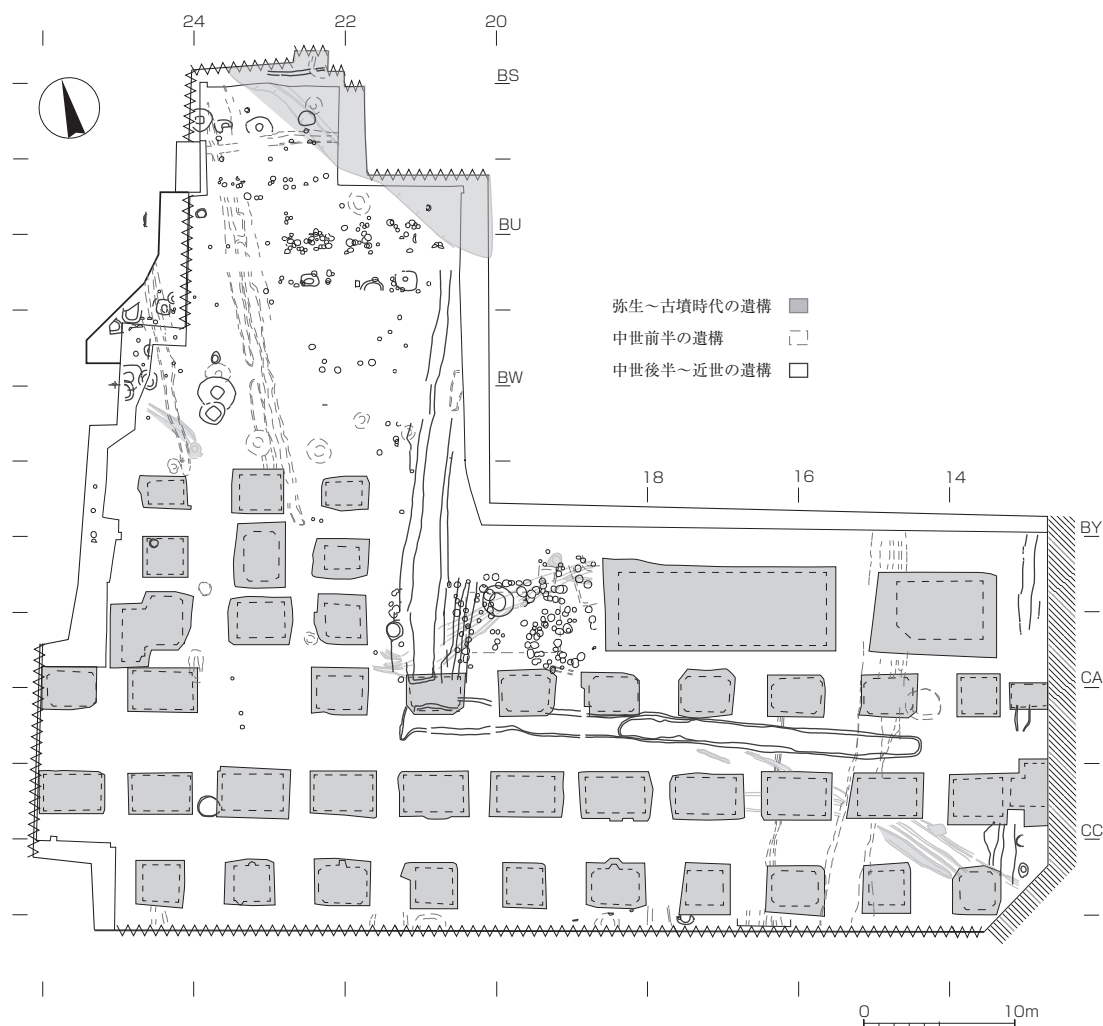


図4 検出遺構全体図（縮尺1/500）

前葉に井戸6・7が認められる。これらの井戸に対応する時期の溝は、溝10～13である。溝10・11は鹿田条里に沿わない、正方位の南北方向に主軸をとる溝で12世紀前半に埋没している。この溝の掘削時期は確定できないものの周辺の遺構の状況から11世紀中頃あたりに求められる。

12世紀中葉～後葉：12世紀中葉～後葉の井戸8・9が認められる。対応する溝は溝14・14aで12世紀後半～末に埋まっている。溝14・14aは鹿田条里に沿う南北方向の溝で区画溝である。

13世紀初頭～中葉：13世紀初頭～前葉の井戸10、同前葉～中葉の井戸11が認められ、対応する溝は溝15・16である。溝15は13世紀前半、溝16は13世紀前葉に埋まる。溝15は12世紀の溝10・11に並行する正方位の南北方向の溝である。溝16は東西方向の溝で、溝15とセットで屋敷地を区画するものと考えられる。

13世紀後半～後葉：13世紀後半の井戸12、同後半～後葉の井戸13、同後葉の井戸14の3基が認められる。対応する溝は溝17・18・20である。いずれも埋没時期は13世紀末～14世紀初頭に求められる。このうち溝18は南北方向の大型溝であり、主要な区画溝の一つである。

鹿田遺跡では10世紀～11世紀初めに集落が認められない空白期が指摘される。本調査地点では、その空白期の後、11世紀前半～14世紀初頭まで各期に2～3基の井戸の存在が確認されている。掘建柱建物1棟を含む、多数のピット群も検出されており、少しずつ地点を変えながら2ないし3つの屋敷が営まれていたことが窺える。

**中世後半～近世**：井戸11基、土坑15基、溝5条を検出した。

中世後半～近世においても、溝で区画された屋敷地が、調査区内において確認されるが、特に調査区北部に偏在する傾向にある。15世紀後半～16世紀の井戸3基について、17世紀前葉～18世紀代の井戸3基が認められ、もっとも新しい時期の井戸としては19世紀初めの井戸1基が確認されている。周辺の既調査地点では、17世紀中頃以降は屋敷地は継続せず、耕作地として利用されるようになるが、本地点では異なる様相が見られ、15世紀後半～19世紀初頭まで、屋敷地が継続する。これら屋敷地を区画する溝（溝21～24）は、鹿田条里に沿い、1辺40mほどの方形を呈している。溝はいずれも14世紀中頃に掘削された可能性があり、埋没時期は19世紀初頭に求められる。

その溝が埋まった後、桶の据えられた野壺1基が確認される。このことから19世紀半ば以降は本調査地点一帯も耕作地へと変わったことがうかがえる。